

小樽商科大学プレクトラム・アンサンブル 第37回定期演奏会

本井 理

総評

かねてから筆者は大編成によるトレモロ奏法主体・音量追求型のマンドリン・ギター合奏に対して非常に厳しい評価をしてきたが、わが国で主流となっているこうした「イタリア古典型合奏団」において小樽商科大学プレクトラム・アンサンブル（以下「小樽商大」と略する）は本稿執筆時点で文句なく国内最高、否、世界の頂点に位置するといっても過言ではない。その演奏は音楽として、芸術として十分評価に値するもので、管弦楽や吹奏楽と同一のステージにのって比較されても遜色がない内容である。

もちろん、筆者は（居住地こそ北海道だが）これまでに全国の学生（中学校・高等学校・大学）および社会人のマンドリン・ギター合奏団で主だった団体の演奏を耳にしており、最近の動向についても演奏会に行く、あるいは録音を取り寄せるなどして把握した上で、以上の結論を下している。

どのような点を高く評価したのかというと、第一に出演者が52名（指揮者を含むので奏者は51名：パーカッションの賛助出演者を除く）と比較的規模の大きな編成であるにもかかわらず、大編成になればなるほど汚くなる擦過音や複共鳴といった耳障りな「雑音」がほとんど感じられないことである。以前に論評した社会人団体「プレットロ・ノルディコ」の出演者は指揮者を含めて51名であったが、その演奏は汚くて聴くに堪えないもので、音楽としては論評の対象外であった。ちなみに同団体は指揮者以下、小樽商大のOBが多いのは何とも皮肉なことである。

一般に、学生団体が社会人団体に音質の面で勝っているのは当然で、楽器の経年劣化（特にマンドリン属の表面板とブリッジの物理的疲労）に差があるためだが、加えて小樽商大は見事なまでに平行奏法で統一されており、トレモロの際にピックが弦に対して極端に斜めに当たっている奏者が少ないので擦過音の発生が抑えられている。

さらにマンドセロパートなどで往々にしてみられる狂気の「腕弾き」「抉り弾き」「殴り弾き」についても理性をもって抑制されており、楽器の負荷が小さいため良好な発音性能が保たれている。同じ月に開催された「札幌シンフォニカ・マンドリーノ」の定期演奏会に際して筆者はマンドリン属全楽器についてブリッジ調整と調弦を担当し、参加してくれた

小樽商大現役部員の楽器を仔細に検分する機会を得たが、構造的にひ弱で一種の欠陥商品である「カラーチェ」に表面板の陥没がほとんど見られなかったのに感心した。湿度管理は不十分であったが、ブリッジ調整もまめに行っているようで、技術の高さがうかがえる。

第二に評価すべき点は、音楽の三要素（リズム・メロディー・ハーモニー）で日本人がもっとも苦手とするリズムの概念と重要性を指揮者・奏者とも理解し、しっかりと身に付けていることである。実は小樽商大と交流がある「北海道大学チルコロ・マンドリニスティコ『アウロラ』」「藤女子大学マンドリンクラブ『フジフロイライン』」も「音（トレモロ）がきれいだ」という点では優劣が付け難いレベルにあり、日本の大学のマンドリン・ギター合奏団の中では有数の美しい演奏をしているのだが「リズムの真の概念を理解しているか」あるいは「リズム感が身に付いているか」と問えば、残念ながら小樽商大に遠く及ばない。

そして、シンコペーションのパターンとシンクロさせることでリズムが明確に表現できることこそ、撥弦楽器たるマンドリン属が擦弦楽器や管楽器に勝っている長所なのだ。

先にOB連が聴くに堪えない演奏をすると書いたとおり、以前は小樽商大も全国の多くの大学のマンドリン・ギター合奏団と同様、音量偏重の姿勢が顕著で、相当パワフルで乱暴な演奏をしていた。しかし、いかに根性を入れて演奏しようとマンドリン・ギター合奏が音量の面で管弦楽や吹奏楽に太刀打ちできる訳がなく、楽曲構築に不要な要素である擦過音や複共鳴といった雑音が増すばかりか、表面板の陥没を招いて発音性能が低下するなど楽器にダメージを与え、トレモロを弾き過ぎればリズムやフレージングを壊してしまうなど、よいことは何一つないのである。

それが大きく垢抜けたのは、ここ数年、感性ある指揮者が続いたためと思われる。

過去にも川高由希子さん（1998年）のような逸材が出ているが、その年の演奏会が終わると元に戻ってしまっていた。しかし、2002年の正指揮者・高澤香織さん（リズム感がよかった）の前後から変化の萌芽がみられ、2003年の大場慎二君（彼も大変な逸材であった）、2004年の工藤智弘君（感性が細やかな半面、出来・不出来の落差が激しかったが100点満点といってもよい好演奏を何曲もやってのけた）と有為な人材が続き、2005年の室谷隆裕君で頂点を極めたのである。

小樽商大の正指揮者（3回生）は定期演奏会の晴れ舞台に臨む前に、4つの大舞台を踏まなければならない。まず2回生副指揮者として8月の地方演奏会と11月の定期演奏会、そして3回生になって5月の「マンドリン音楽祭」（北海道大・藤女子大との合同）と8月の地方演奏会をこなすのである。

筆者が初めて室谷隆裕君の指揮を見たのは2004年8月21日の苫小牧演奏会である

が、その時の衝撃的な印象は未だに忘れられない。彼は副指揮者として第二部に登場したが、1曲目の『舞曲とサウダージ』（D. クライトラー）で筆者が未だかつてマンドリン・ギター合奏では耳にしたことがないキビキビとしたリズムを出していたのに驚かされた。そして2曲目の『愛の挨拶』（E. W. エルガー）は、とろけるように甘く優しく…。極めつけは3曲目の『劇的序曲』（A. カペレティ）で、楽曲構築のポイントが対位法という構造にあることを完璧に理解しており、さらに独自の解釈も加えた奥の深い演奏には心の底から感動したものである。続く第三部で正指揮者の工藤智弘君が振った『じょんがら』（藤掛廣幸）も屈指の好演奏だったが、あの『劇的序曲』は史上最高かつ世界最高の名演奏といってもよいであろう。

室谷君は続く2004年11月28日の第36回定期演奏会においても第二部で副指揮者として登場し、『華燭の祭典』（G. マネンテ／中野二郎編曲）では次代のスタンダードともいべき新鮮でスマートな演奏を披露した。

このように室谷君は2回生でデビューした当時から既に完成した指揮者であり、余力をもって斬新な演奏を聴かせてくれたが、人間である以上、スランプは必ず訪れる。実は第36回定期演奏会で筆者は彼の弱点を一つ発見した。1曲目の演奏直前に会場内で幼児が泣き出したのに動揺して指揮が大きく乱れ、スピードのコントロールを失いかけたのである。この事件によって、想定外のアクシデントやトラブルが発生した場合に冷静な判断を失い、完璧に仕上がらないと悟った瞬間、やけを起こして投げ出してしまうのではないかという懸念を抱いたのであった。

予想は、やはり現実のものとなった。本年6月5日に開催された「マンドリン音楽祭」では再び『劇的序曲』を選曲して前年の演奏とは比べるべくもない凡演に終わり、失敗を恐れてチャレンジ精神よりも安全策を採る性向をはっきりと見せたのである。

同演奏会での失敗（筆者がそう感じただけで本人や関係者が失敗と認識したかは不明）により迷走は続き（?）、8月20日の岩見沢演奏会では「速い速い病」（クラシコT型）や「迫力を追求して汚い汚い病」（アルテ・マンドリニスティカ型）の病原菌に感染して、何ということもないレベルの作品なのに指揮は完全に空回り。音楽として評価に足る演奏は1曲もないという惨状に陥ってしまった。一方、この演奏会で副指揮者としてデビューを果たした藤原佑輔君は、緻密な組み立てで手堅く演奏をまとめたのである。

それから3ヵ月余り、どのようにして室谷君が己との心の戦いに勝利したのか、筆者は知らない。ただ、依然として「本来発揮し得る能力の範囲内の安全運転」という不満は残ったものの、演奏については冒頭に記したとおり特に論評する必要がない好結果であり、

心から拍手を贈りたい。

本演奏会は集客や運営についても、これまでのノウハウを活かして無難にこなしていたので、イベントとしても成功であったと思う。強いていえば、例年、チューニングの時間稼ぎも兼ねて第一部と第二部の間に行われる首席奏者による楽器紹介が、世界有数の芸術的な演奏内容に比べて非常に田舎臭く感じられるようになったことであろうか。

楽器紹介という企画は地元密着、あるいはマンドリン・ギター音楽の普及という観点から筆者も大賛成であるが、もう少し内容や出番を考えた方がよいように思われる。

#### **エンマーイゾッタ**（ウーゴ・ボッタキアーリ）

楽曲構築のポイントであるガボットのリズムが出ていたため悪い演奏とはいえないが、テンポが速過ぎたように思う。敢えていえば、この演奏だけが全体の中で若干見劣りしていたように思われるが、室谷君の「病気」が治ったのが分かって嬉しくなった。

#### **間奏曲**（サルヴァトーレ・ファルボ＝ジャングレコ）

特にいうことなし。ただ、指揮者および団体の演奏能力は楽曲の難易度を大幅に上回っており、筆者としては期待が強過ぎただけに「完璧に弾けて当たり前」という評価で、今一つ感動が薄い。

#### **歌劇『運命の力』序曲**（ジュゼッペ・ベルディ／久保田孝編曲）

文句なく名演奏で「天晴れ」という言葉しかない。

ただ、このアレンジはひどい。もっとよい編曲があったのに…。

#### **舞踏会の美女**（ルロイ・アンダーソン）

第二部に入って副指揮者の藤原佑輔君が登場。この作品はウィнна・ワルツほど顕著ではないにせよ、3拍子（1－2－3）を長さでは2 > 1 > 3、強さでは1 ≧ 2 > 3で取らなければ曲にならない。筆者がこれまで聴いた限り、このリズムが取れていたマンドリン・ギター合奏団はないが、それを見事にやってのけた点を高く評価したい。速度がやや遅かった点に不満も残るが、史上初の快挙により帳消し！

#### **パヴァーヌ**（ガブリエル・フォーレ）

美しい演奏で、指揮者の緻密さが光っていた。

#### **歌劇『アルテミシア』序曲**（ドメニコ・チマローザ）

同じく非常に丁寧な演奏で、この演奏が全演奏曲目のベストという声も強かった。

#### **前奏曲第1番「誓い」**（加賀城浩光）

第三部に入って再度、正指揮者の室谷君が登場。この演奏も特にいうことがない。

なお、以下は余談として読んでいただきたいのだが、筆者はこの手の作品が大嫌いだ。

理由の第一は、所詮、藤掛廣幸氏の作品の二番煎じに過ぎないからである。

理由の第二は、トレモロ奏法から脱却できないメロディックな作品は音楽的にはフォークソングの延長線上にあり（延長線の逆方向をたどれば演歌→軍歌→唱歌→長唄→謡曲→看経といった日本人が脱却できない単一斉唱の流れが見えてくる）、その世界に嵌ると合奏で重要なリズムやハーモニーが軽視されることになりかねないからである。またフォークソングを愛唱した「サヨク」世代こそ、まさに日本という国を駄目にした元凶なのだ。

理由の第三は、特にマンドリン・ギター合奏で演奏すべき音楽的必然性がないからである。

そして理由の第四は、新曲を演奏しても旧来の作品との違いが印象に残らず、レパートリーとして定着しない、すなわちマンドリン・ギター合奏の発展に貢献しないからである。

小樽商大では近年、なぜか第三部で加賀城作品を取り上げているが、特に義理でもなければ、もうそろそろ止めてはいかがかと思う。世界には価値ある未知の作品が多数あり、諸君に演奏される日を待っているのだ。

### 舞踊風組曲第2番（久保田孝）

演奏は、もちろん非の打ち所がなく、「クボタ・フィロ・マンドリーネン・オルケスター」の演奏など足下にも及ばぬほど上手い。ただし、この作品は高等学校の演奏団体にスタンダード・ナンバーになっているなど演奏の難易度は高いとはいえ、『劇的序曲』と違って底の浅い作品なので、さすがの室谷君といえども、新たに掘るべき物や工夫の余地は少なかったように思われる。

以上、ほとんど論評の余地がない演奏結果であったが、やはり指揮者や奏者の演奏能力に対して曲目の難易度が低過ぎ、弾けて当然という期待を持ってしまうが故に感動が薄い。

後日、論評を発表するが、本演奏会の後に開催された「北海道大学チルコロ・マンドリニスティコ『アウロラ』」の定期演奏会では団体のポテンシャルを大幅に上回る難易度の高い選曲が行われ、演奏面では各所に穴がみられたほか、最後の方になると完全に力尽きていたが、感動では彼に軍配が上がる。北大がエンディングで学生歌を演奏すると会場から手拍子が湧き上がったが、小樽商大はエンディングに学生歌を演奏しても聴衆の手拍子が起きず、厳粛な雰囲気の中に（？）幕を閉じた。

音楽（芸術）の究極の目的は、感動を伝えることであるが、本当に難しいことだと思う。

しかし、小樽商大が同一の演奏内容を首都圏あるいは関西で公演したならば、あまりのレベルの高さに業界関係者は皆、腰を抜かすであろう。一部OBの方々も自分たちが運営する低レベルな社会人団体に現役部員を勧誘する行為を情けないと恥じ、初の本州公演のために資金集めをしてあげてはいかがかと思う（2005.11.27.15:00～、小樽市民会館）。